

● 大谷 育恵 特定助教

Ikue OTANI (Assistant Professor)

研究課題: 考古資料に基づいた漢対匈奴交渉と匈奴社会の解明
(Han-Xiongnu interaction and the society of Xiongnu:
Consideration based on archaeological evidence)

専門分野: 考古学 (Archaeology)

受入先部局: 人文科学研究所 (Institute for Research in Humanities)

前職の機関名: 国立民族学博物館

(National Museum of Ethnology)



ユーラシア大陸の中央部には、西は黒海沿岸から東は大興安嶺にいたるまで草原地帯が続いています。草原地帯では草と水を追って季節ごとに一定地域を移動する遊牧が営まれてきましたが、この地で騎馬遊牧技術が普及し、騎馬遊牧民が登場するのは紀元前10世紀頃からです。草原地帯上の遊牧集団の動向は、互いに隣接する遊牧集団間のみならず、南に隣接する農耕・牧畜を生業基盤とする国家の興亡に関与してきたという点が重要といえます。しかしながらこの遊牧集団の歴史は、遊牧民が自らの歴史を文字で書き残すことが中世までは基本的になかったため、草原地帯西部ではヘロドトスの『歴史』、東部では司馬遷の『史記』を代表とする隣接地域の史料を通して考えることになり、またその情報も限られるということが問題です。考古学は遺跡の発掘調査を通して遊牧民の過去を知るための実物資料を得ることができるため、白眉プロジェクトの5年間ではモンゴル国で発掘調査を行い、匈奴の実態を明らかにすることを目指してゆきます。

The Eurasian Steppe forms a belt across the Eurasian plate, extending from the northern coast of the Black Sea to the Greater Khingan range. For centuries, nomadic people had moved the steppe seasonally seeking grass and water, but it was not until the tenth century BCE that riding horseback became common. The study of nomadic powers on the Eurasian Steppe is important because nomadic powers were not only related to each other, but also affected the empires that were established in the south at the agricultural and pastoral borders. However, these nomadic people did not use a written language and left no historical records until the Early Middle Ages. Therefore, we can only learn about them through their neighbors; our knowledge about the western part of the steppe depends on the "Histories" of Herodotus, and information about the eastern part depends on SiMa Qian's "Records of the grand historian". These historical records are limited in number, but archaeological remains can provide us with direct information.

As a scientist in the HAKUBI project, I will excavate the remains of the Xiongnu, an ancient nomadic tribe that established the first nomadic empire on the Eastern steppe. I will find information about Xiongnu society through material culture.

北方草原地帯の遊牧民族と匈奴

ユーラシア大陸の中央部には、年間降水量が約500mm以下と少ないために、草原が砂漠が広がっている。西は黒海沿岸から東は大興安嶺にいたる直線距離にしておよそ8000kmになるこの草原地帯は、騎馬遊牧民の故郷である。遊牧とは、群れをなす習性をもつ有蹄類と共生しながら移動性の高い暮らしを営む生活様式であるが、より多くの動物を管理するために家畜化した馬に騎乗するようになり、移動速度と範囲を広

げていったと考えられる。

騎馬遊牧民が歴史的に注目されるのは、時として機動性の高い騎馬戦士集団となり、また時としてユーラシアの東西をつなぐ文化伝達者の役割を果たしたためである。中世以前の騎馬遊牧民は自らの手で歴史を書き残していないが、草原地帯西部では古代ギリシャのヘロドトスが記した『歴史』にスキタイが登場するし、草原地帯東部では漢の司馬遷が記した『史記』に匈奴が登場し、その姿が記述されている。

匈奴の遺跡の考古学調査

匈奴は、草原地帯東部で最初に強大な遊牧政権を確立した古代遊牧民族である。その匈奴が残した遺跡は、現在のロシア連邦、モンゴル国、中国に分布している。匈奴の遺跡が注目されるきっかけとなったのは、1924年のP. K. コズロフによるノヨン・オール匈奴墓地の発掘調査で、多様な絹織物や華麗な動物文様で装飾された豪華な副葬品は東西学界の関心を集めた。しかしながら、1931年には第二次世界大戦のために調査が中止し、以降冷戦終結まで目立った調査が長らく行われなかった。状況が変化したのは2000年以降で、世界各国が調査団を派遣し、調査が再活性化している(図1)。

発掘調査を通じて分かってきたこと

考古学調査が開始する以前、匈奴については史料に残る記録が主な情報源であった。「水と草を求めて移動し、城郭や常住して耕田作業をすることがない」と記録された匈奴であるが、半地下式住居のある居住地、土城址、土器を焼いた窯や製鉄炉のある生産遺跡が発見され、単に遊牧生活を営んでいたという匈奴像とは違う一面が見えてきた。墓地についてもこの20年間で王陵級の大型墓が各国によって集中的に発掘調査されたことにより、いわゆる「草原のシルクロード」を介した東西交渉を考察できる多様な副葬品が出土している(図2)。またそこから史料の記載を裏付けるように絹織物や馬車など漢に由来する文物も多数出土しているが、新たな問題として浮かび上がってきたのは、それら豪華な副葬品をもつ匈奴大型墓の年代は匈奴が

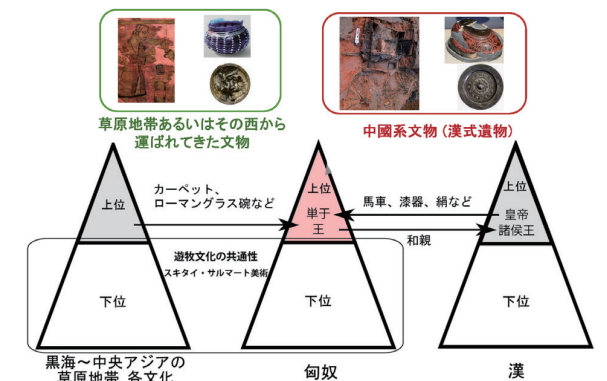


図2 匈奴を介した東西交渉。

最も精強であったと記録されている秦～前漢初期(前3世紀末～前2世紀前半)ではなく、前漢末～新(前1世紀後半～紀元前後交替期)にあたるという点である。すなわち、史料に匈奴が漢をも凌ぐほど精強であったと記載されている時期の匈奴の遺跡はまだ見つからないのである。

より具体的な匈奴の実像を求めて

ユーラシア草原地帯上の初期鉄器時代の諸文化の中から、後に匈奴と呼ばれる集団がどのように発生し強大化してゆくのかを探るため、白眉プロジェクトの5年間を通じて、モンゴル国において匈奴遺跡の発掘調査を実施する予定である。主に中・小型墓から構成される「匈奴一般民衆墓」と呼ばれるクラスの墓の調査を積み重ね、遺跡と遺物に加えて出土人骨や動物骨に関するデータを蓄積する。匈奴が強大化した背景には漢対匈奴の外交関係や交易が影響しており、また政権確立にともなって社会構成集団の階層化があったと考えられるが、現在のところ匈奴初期にあたる秦～前漢初期の年代の匈奴遺跡はごく少数しか確認されておらず、匈奴期を通じてその強大化と社会複雑化のプロセスを追うことができていない状況にある。その理由は、現在の調査が王陵級大型墓に集中しているという研究状況に起因している部分があり、モンゴル高原各地に数多く存在する一般的なクラスの匈奴墓調査を通じて、考古学の面から匈奴社会の実像と年代について明らかにしてゆきたい。

参考文献

[1] 大谷育恵 2019 「匈奴」『ユーラシアの大草原を掘る：草原考古学への道標』(アジア遊学 238) 勉誠出版。



図1 匈奴の遺跡。